

小川政弘作 **決別旅行**

勝の母 勝、勝、ほら、ちょっとお手伝いしてよ。ポケーつとテレビなんか見てないで。  
藤田勝 後でやるよ。今面白いとこなんだから。  
母 後じゃなくて、この時間が忙しいの。ほら、ちょっとこの荷物届けてきてよ。3 丁目の岡村さん。  
勝 うるせえなあ。おやじが行きゃあいいだろ。  
母 何てこと言うの。お父さんはこの間の交通事故で、あんまり動くとまだ頭がふらふらして危ないのよ。そんなこと分かっているでしょ。  
勝 知るか! 疲れてポケツとして、一時停止のところを突っ込んで、自分からぶっつけたんじゃねえか。そんなになるまで働いたって、おれなんか大学へも行かしてもらえねえんだぜ。クラスの中で3 人だよ。45 人のうち、たったの3 人、就職組は。みんな、東大だ、慶応だって目の色変えてんのに、おれたちだけがつまはじきだ。  
母 またそれを言う。しょうがないだろう? お前の下にまだ3 人もいるのに、お父さんはああだし、ここはやっぱり長男のお前に頑張ってもらわないと…  
勝 冗談じゃねえよ。そんなに弱い親なら、何で金魚のフンみたいに、次から次と4 人も生むんだよ。挙げ句には苦しいから大学はあきらめろだ。もっと親なら親らしく責任とってやってもらいたいよ。  
父 勝、お父さんは、何もあきらめろとは言っていないよ。ただわたしがこんなことになっちゃったし、先方への賠償金のこともあるし、とても学費は出せそうもない。だから、お前が自分で働きながら行くんなら、いや、せめてこの1 年は、お前が店の方を手伝って、もう少し楽になってからならと…  
勝 (かぶせるように) 冗談じゃねえよ、おやじさん。あんたやおふくろさんみたいに、一日中まるでコマねずみみたいに働いて、ぐったりして床に潜り込んでたんじゃ、いつ受験勉強ができたよ。1 年たったら、頭ん中、空っぽ。もう一度この高校に入れただって、できやしないよ。  
父 勝、それは違うぞ。確かに大変だろう。だが父さんがお前のころは、もっと大変だったんだ。敗戦後の食うや食わずの中で、もう日本中が、明日まで生き延びるにはどうしたらいいかと必死になっていた時だったが、それでも父さんは、『ああ、これで勉強できる。もう空襲警報におびえながら、工場で油にまみれたり、ツルハシ持ったりしなくていいんだ』と思うと、体中から喜びと力が出てきたのを今でも覚えてる。そして父さんは苦勞して高校まで出たんだ。勝、問題はお前自身だ。お前の“やる気”じゃないのか?

勝 おやじさん、時代が違うよ。みんなが一流校と一流企業を目指してなのに、学校じゃつまはじき。家へ帰れば次から次と店番や配達。息が詰まるよ。やっと一息ついて好きなテレビも見れやしない。カッターくてやってらんねえよ、もう。(出ていく。)

母 (かぶせて)どこ行くの、勝。ほら、そのバイクでちょっと行ってきておくれよ、勝!  
(効果音) (バイク音)

ナレーション 藤田勝は青春高校 2 年生。お聞きのとおり、店の手伝い用にと買ってもらったバイクでしたが、父の交通事故で大学進学をあきらめてからは、同じく大学に行けない親友の田中勉と、そのバイクを乗り回すようになりました。

(音楽) (喫茶店音楽)

山下めぐみ いらっしゃいませ。あ、勝君に勉君。

勝 やあ、めぐみ。

勉 オッス。

勝 コーヒー2 つね。

めぐみ はい。

ナレーション 山下めぐみは勝や勉と同じクラス。彼女はこの喫茶店でアルバイトをし、学費をためて、大学進学の前準備をしていたのです。特に勝とは中学から一緒に、大学もできたら一緒に、と話し合ってきただけに、このごろの彼のことが気がかりでならず、神様に祈り続けていました。彼女はクリスチャンでした。

めぐみ お待ちどおさま。あら、どうしたの? 地図なんか広げて。

勝 ああ、明日から二人でツーリングに行くんで、コースを決めてたんだ。

めぐみ あ、そう。で、決まったの?

田中勉 うん、箱根。おれは2、3度行ったことがあるけど、こいつは初めて。大体、東京より外(そと)出るの、初めてだろ?

勝 うん。お前に付いてきゃ大丈夫だろ。とにかく今おれ、1 キロでも遠くへ行きたい心境なんだ。高速道路ブツ飛ばして、高い山の上って、スカッとしたいよ。バイク乗ってる時だけは何もかも忘れられるもんな。

めぐみ …勝君。またご両親と何かあったのね。あまり心配かけちゃダメよ。本当にご両親、あなたのことを思ってたから。

客 ちよっと。

めぐみ は、はい。じゃあ明日、くれぐれも気をつけてね。

ナレーション めぐみはその夜、二人のために祈りました。次の日—  
(効果音) (バイクのエンジン音 2 台分)

勝 勉、マシンの調子はどうだ?

勉 バッチリさ。よし、行こうぜ!

(効果音) (バイク音、遠ざかる。)

ナレーション 二人は一路箱根に向かって出発しました。間もなく東名高速道路に入り、二人は飛ばしに飛ばしました。70、80、90、メーターの針はグングンあがり、次々に新しい景色が現れては後ろに消えます。風が体の中まで吹き抜け、ノドはカラカラに渴き、爆音とスピードの中で、勝は、頭の中が空っぽになったように感じました。

勝(モノ) このまま、空の向こうのどこかに飛んでいきたいなあ。

ナレーション やがて高速道路を下りてしばらくしてから、二人のバイクを別のバイクが追い抜きました。

勉 クソ! おい、勝、負けるなよ!

勝 よーし!(アクセルを吹かす音)

ナレーション 二人はそのバイクとスピードを争い、ついに抜き返しました。

勝 やったぜ。

勉 ざまあ見やがれ。

ナレーション そして湯本の町に入り、目指す箱根まで後わずかという時— (バイク停止)

勝 おい、勉、あれ何だ?

勉 事故だ、事故だよ。

ナレーション 黒山の人だかりの中で二人が見たものは、電柱にぶつかりフロントガラスがメチャメチャに割れたライトバンと、そのバンに衝突して跳ね飛ばされたいらしいバイクの横倒しの姿でした。バイクのハンドルと前輪はねじ曲がり、苦痛にゆがんだドライバーのヘルメットの間からは、血がドクドク地上に流れ出していました。

勝(モノ) ひ、ひどい。あれが事故か。もう助からないかもしれないな。乗ってる時は、怖いものは何もないような気分だけど、一瞬の違いで、おれもあんなっちゃうのか…。

ナレーション その日の夕方、二人は箱根に着きました。

勝 あーあ、疲れた。どっと力が抜けちゃったよ。

勉 そうだろ。こんな遠出、お前初めてだもんな。しかし今日は飛ばしたなあ。あいつらを抜いた時は、町中(なか)で 80 キロぐらい出しちゃった。ハッと気がついた時は、さすがのおれもアセったぜ。じゃ、おれ、ちょっとうちに電話してくるよ。無事に着きましたってな。

ナレーション 勝は、同じように大学に行けなくても、こうして家族と仲良くやっている勉をうらやましく思いました。

勝(モノ) あいつは父親を早くに亡くし、おふくろさんを助けるために、自分から、高校を出たら町の自動車修理工場で働くことに決めたんだ。そこへ行くとおれは…

ナレーション そこへ勉が慌ただしく戻ってきました。

勉 あ、勝、おれ今すぐ帰るよ。

勝 え? どうしたんだよ、急に。

ナレーション 勉の母が、急に倒れて入院したというのです。

勝 じゃ、おれも帰る、一緒に。

勉 ダメだ。おれは近道知ってるから、少し飛ばして帰るが、とてもお前の面倒見  
てられない。かといって東京までの夜道をお前一人じゃ無理だ。勝、お前、明  
日の朝、一人で帰ってこいよ。

勝 一人で? だ、大丈夫かな、おれ。

勉 大丈夫だ。おれなあ、親友のよしみでお前に一つ言いたいことがあったんだ。  
ちょうどいい機会だから言っとくけど、お前、もう少しやる気を出せよ。だれにも  
頼らず、一人でな。お前のおやじさんもおふくろさんもあんな一生懸命やって  
んのに、お前が大学行けなくなたからって、あんなスネたマネしてんのは、甘  
えだよ。もっと自分を見詰めて、自分の思うようにならなくても人のせいにな  
いで、自分で道を切り開いていくなだよ。

ナレーション 勝は、思いもかけない勉の言葉に、脳天を殴られたような思いがしました。

勉 偉そうなこと言うようだけど、実はおれも、あのめぐみに教えられたんだ。あの  
子は偉いよ。いつだったか、おれをつかまえて、聖書開いてこんこんと説教さ。  
キリストが『我は道なり、我に従え』って言ったとおりに信じて生きれば道は開  
けるって。おれもまだ信仰のことは分からないけど、その時から、なんか自分  
が変わったよ。一さてと、これが東京までの大体の地図だ。めぐみも祈って  
くれているだろうから、明日は安全第一で頑張れよ。また東京で会おう。じゃあな。  
つ、勉…。

勝

ナレーション その夜、独りで床に就いても、勝はなかなか寝付かれませんでした。体は綿  
のように疲れているのに、頭のシンが覚めているのです。今日出遭った事故  
現場の生々しさと、勉やめぐみの顔が次々に浮かんでくるのです。

(効果音) (ブルルー キー ガシャーン)(車事故音)

勝(モノ) (エコー)あれで終わりか。命って何だ?

勉 (エコー)勝、甘ったれはやめろ。生きるんだ、自分で。

めぐみ (エコー)勝君、祈ってるわよ。

ナレーション 次の日、勝はバイクに乗りました。これから一人で東京に帰るのです。8月の  
空は抜けるような青空でした。大きく息を吸うと、勝はアクセルを一杯に吹かし  
ました。

(効果音) (エンジンのかかる音。アイドリング音。)

勝 …神様。

ナレーション 勝は、一路東京へ向かって走り出しました。この旅を無事に終えた時に、古い

自分に決別できるであろうことをひそかに予感しながら――。

(効果音)

(バイクエンジン音、次第に遠ざかる。)

<完>